

知的障がい者支援の民間ネットワーク研究 人々 を巻き込むアクティビティ及びプログラムの考察

著者	渡邊 浩美
雑誌名	福祉社会開発研究
号	9
ページ	67-76
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008550/

知的障がい者支援の民間ネットワーク研究 —— 人々を巻き込むアクティビティ及びプログラムの考察 ——

障害ユニット 客員研究員
特定非営利活動法人スペシャルオリンピックス日本・福岡
渡邊 浩美

キーワード：知的障がい者、スペシャルオリンピックス、ユニファイドスポーツ®

ツ®のプログラムやアクティビティの事例を概観し、共生意識を強く打ち出したユニファイドスポーツ®の取り組みが、知的障がい者を支える民間支援ネットワーク構築にどのように影響するかを考察する。

1. はじめに

「スペシャルオリンピックス (Special Olympics/以下、SO)」は、知的障がいのある人たちに、年間を通じたスポーツトレーニングと競技の場を提供することで、彼らの自立や社会参加の促進を図ってきた世界的な運動である。活動に参加する知的障がい者は「アスリート」と呼ばれ、アスリートがスポーツ活動を通して、「健康を増進し、勇気をふるい、喜びを感じ、家族や他のアスリートそして地域の人々と才能や技能そして友情を分かち合う機会を継続的に提供すること」が使命とされている。

1968年にスペシャルオリンピックス国際本部 (SOI) が組織化され、活動は世界に広がった。2015年度末のSO国際本部の調査によれば、世界169ヵ国で4,697,934人のアスリートとボランティア1,147,292人が参加している。

SOにおける競技者は、従来、アスリートと呼ばれる知的障がい者のみが対象であったが、近年積極的に導入されている「ユニファイドスポーツ®」により、障がいの無い個人も、「パートナー」という競技者として位置づけられ参加促進が図られるようになっている。本研究報告では、2016年度に行われたユニファイドスポー

2. SOユニファイドスポーツ®の考察

(1) ユニファイドスポーツ®推進の背景

スペシャルオリンピックスが提唱しているユニファイドスポーツ®とは、知的障がいのある個人 (スペシャルオリンピックスのアスリート) と知的障がいのない個人 (パートナー) が、いっしょに、チームメイトとしてスポーツに取り組むプログラムである。

従来のSOプログラムと同様に、SOコーチの指導のもと、アスリートとパートナーは日頃から一緒に練習することで、競技中は「チームメイト」、日常では「仲間」「友だち」としてお互いに相手の個性を理解し、信頼を深め、助けあう関係を構築していくという共生社会を意識した実践的なプログラムである。

SOにおけるユニファイドスポーツ®は、1989年より欧米を中心に組み込まれていたのだが、パートナー選びの困難さからなかなか定着できずにいた。しかし、2012年に「SOスポーツルール総則」が改訂され、それまでネックとなっていた「知的障がいのあるSOアスリートと同程度の年齢と競技能力」が条件であったパート

ナーの定義が多様化したことによりユニファイドの定義が広がり、それ以降格段に取り組み安くなった。また、SO国際本部では、ユニファイドスポーツ®を重点事業と位置づけ成長戦略計画に盛り込み、2012年以降積極的に全世界のスペシャルオリンピックス組織に発信している。

この改定の背景、つまり、ユニファイドスポーツ®推進を柱とした成長戦略には、近年の社会環境の変化が大きく関係していると考えられる。

1960年代当初に始まったスペシャルオリンピックスは、知的障がい者にスポーツをする権利と自由をもたらし、スポーツによってエンパワーされたSOアスリートは、社会に参加し社会に認知される存在となっていた。しかし、それから約半世紀が経った今でも、差別、貧困、紛争等の様々な社会的排除は無くなるどころか一層激化し、日々新たな社会的弱者を生み出している。この混迷した21世紀社会において、もはや、障がい者というキーワードだけでは人々の関心が集まらない時代になっているのも現実である。

そういった時代背景の中、「アスリートたちの健康や体力増進、スキルの向上を促進するだけでなく、多くの人々との交流が彼らの社会性を育くみ、適切な指導と励ましがあれば、アスリートたちは少しずつでも確実に上達し、自立への意識を高め成長する。」というSOが掲げる使命だけでは人々の共感が得られなくなるというSO国際本部の組織的危機感が、ユニファイドスポーツ®推進を急務とする一因であると考えられる。

一方、「スペシャルオリンピックス参加の効果はアスリートだけでなく、家族の絆が強くなり、地域社会も参加、見学により、知的障害のある人々を理解し、尊敬し、受け入れるという効果がある」というSOの理念に定義されているように、SO活動の有益性はアスリートに対してのみではなく、地域社会への共生意識の浸透において大いに発揮されてきた。SO誕生当初より、共生社会を強く意識した活動として推進してきた50年の実績と人々を巻き込むユニファイドスポーツ®は、社

会におけるソーシャルインクルージョンの定着を可能にする時代のニーズに応じたスポーツモデルであり、今後のSO活動推進の礎となるだけでなく、スポーツ・レクリエーションを通じた共生社会構築のベストプラクティスとなる可能性を有している。

（2）ユニファイドスポーツ®とは

ここでは、2012年にSOスポーツルール総則改定により定義が広がったユニファイドスポーツ®を概観する。

【ユニファイドスポーツ®の定義】

- ・ 知的障害のある個人（スペシャルオリンピックスアスリート）と 知的障害のない個人（パートナー）が共にチームメイトとして競技に参加する。
- ・ ユニファイドスポーツ®を実施するアスリートとパートナーは、競技中はチームメイト、競技を離れた日常では「仲間」「友だち」という関係の構築を目指している。
- ・ アスリートとパートナーは、競技の基本的スキルや戦略を身につけている必要がある。
- ・ ユニファイドスポーツ®は、スペシャルオリンピックス（以下SO）のコーチが指導する。
- ・ 競技会を実施する場合、チームはSOのディビジョニングの手順に従い、年齢や競技能力に基づいて他のユニファイドスポーツチームと共に競合できる ディビジョンに分けて競技会を行う。

【ユニファイドスポーツ®の3モデル】

ユニファイドスポーツ®には、以下の3つのモデルがあり、構造や機能はそれぞれ異なっている。

①ユニファイドスポーツ	
特徴	・競技性の高いモデル ・チーム競技のチームメイトとして、競技やトレーニングに参加
構成	アスリートとパートナーは、ほぼ同数
ルール	SOスポーツルールに従う（必要な競技スキルや戦略を身につけておく）
年齢	同程度
競技能力	同程度
その他	アスリートとパートナーの年齢・競技能力の組み合わせは競技ごとに定義

②ユニファイドスポーツ・プレーヤーデベロップメント	
特徴	・高い競技能力を持つプレーヤーが、競技能力の低いチームメイトの技術や戦略を上達させることを補佐しながら、ユニファイドスポーツ®を目指すモデル ・チーム競技のチームメイトとして、競技やトレーニングに参加
構成	アスリートとパートナーはほぼ同数
ルール	チームメイトが同程度の競技能力であるということに関する条項を除き、SOスポーツルールに従う
年齢	同程度
競技能力	同程度でなくとも構わない
その他	・アスリートとパートナーの年齢・競技能力の組み合わせは競技ごとに定義（競技会には参加できない）

③ユニファイドスポーツ・レクリエーション	
特徴	・アスリートとパートナーのための包括的なレクリエーションの機会 ・社会参加や競技能力、知識の向上を推進するもので、学校や地域のクラブ、公私問わず様々な場所で開催できる
構成	制限はない
ルール	制限はない
年齢	制限はない
競技能力	制限はない

スペシャルオリンピックス日本 2013「ユニファイドスポーツ導入と普及」より

従来は、①のユニファイドスポーツ®モデルしか存在しなかったため、同年齢、同程度の競技能力をもったパートナーと日常的にスポーツトレーニングを行うことは大変困難であり普及の妨げになっていたのだが、2012年の改定により、新たに「ユニファイドスポーツ・

プレーヤーデベロップメント」と「ユニファイドスポーツ・レクリエーション」の2つのモデルが追加され、ユニファイドスポーツ®に着手しやすくなった。特にユニファイドスポーツ・レクリエーションは、パートナーに関する条件設定もなく、知的障がいのあるアスリートと共にスポーツ・レクリエーションを楽しむことを主眼としているため、多様な人々が参加しやすいことで、実施しやすく汎用性が高いアクティビティとして受け入れられ始めている。

3. ユニファイドスポーツ®の事例報告

本節では、地域社会への浸透性とアクティビティとしての汎用性が高い「ユニファイドスポーツ・レクリエーション」を用いたイベント事例を報告する。

（1）ユニファイドボッチャ・チャレンジマッチ

2016年6月、世界から約25,000人が参加し、福岡市において「第99回ライオンズクラブ国際大会」が開催されたことに伴い、同国際大会の公式行事として、ライオンズクラブ（LC）の青年部であるレオクラブとSOアスリートが混合チームを組み、ボッチャマッチを行った。

開催日時：2016年6月26日（日）15：10～18：00

会場：福岡国際センター1階（福岡市博多区）

提携団体：ライオンズクラブ及びLCレオクラブ

〈チーム構成〉

- ・スペシャルオリンピックス アスリート22名（SON・山口、福岡、熊本の3地区から参加）とライオンズクラブ レオクラブ22名を各2名ずつ、合計4人1チームで構成
- ・チーム数は合計で11チーム

〈対戦方法〉

- ・3つのディビジョンに分けてリーグ戦またはトーナメント方式で順位表を決定、表彰を行う
- ・ディビジョンⅠ 3チーム、ディビジョンⅡ 4チーム、ディビジョンⅢ 4チーム

※ただし、競技能力によるディビジョニングは行わず、抽選によるグループ分けとする

〈ルール〉

試合は16点先取、又は試合時間が35分経過時点での合計得点で勝敗決定

SOアスリートとレオクラブのパートナーは当日初めて顔合わせのため、最初はぎこちなさも見受けられたが、競技が進むにつれて会話も増え、一緒に戦略を話し合いながらプレーを行い、自然な流れの中でチームメイト同士がハイタッチをし喜びを共有する場面が随所で見受けられた。チームプレーに集中していく過程において、相手チームに勝つという目標を共有することで、互いに励まし合い、戦略を話し合う等のコミュニケーションが自然に図られたことにより、障がいのある無しにとらわれず、人間関係を構築するという効果が得られたと考えられるが、これは、ボッチャの競技特性とパートナーの資質によるところも大きい。

ボッチャは、2016年に開催されたりオパラリンピックにおいて、日本代表が銀メダルを確得するという快挙によりメディアでも多く報道され注目された競技でもあるが、重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツである。ボッチャは、パラリンピックの公式競技であるが、ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競いあう競技である。なお、スペシャルオリンピックスのボッチャ競技では、パラリンピックのボッチャとは異なる用具（目標球はパリーナと呼び、ボッチャボールは木製）を使用している。

ボッチャ競技が持つ、理解しやすいシンプルなルールと身体能力に左右されずに誰もが気軽にプレーに参加できることや逆転劇が多いというゲーム性の高さが、障がいのある無しにとらわれず、短時間の中での人間関係の構築に効果的な影響を及ぼしたと推察される。

また、ライオンズクラブのレオクラブのメンバーがパートナーであったことも効果的に作用している。レオクラブは、「地域、国、国際社会の一員としての責任を果たし、世の中に貢献できる人間に成長する機会を青少年に与える」ことを目的に組織された12歳から30歳の青少年が参画する奉仕団体であり、「リーダーシップ：チーム・リーダーとしてのスキル育成」、「経験：チームワーク、協力、及び共同作業を通じて、地域社会及び世界に変化を促すことを理解」、「機会：友人を作り、地域奉仕に対する精神的な報酬を得る」ことをモットーとし活動している。日頃の活動を通じて培われたインクルーシブな精神と社会性の高さを持つレオクラブのメンバーは、ユニファイドスポーツ®のパートナーとしても最適であった。

【ボッチャマッチの様子】

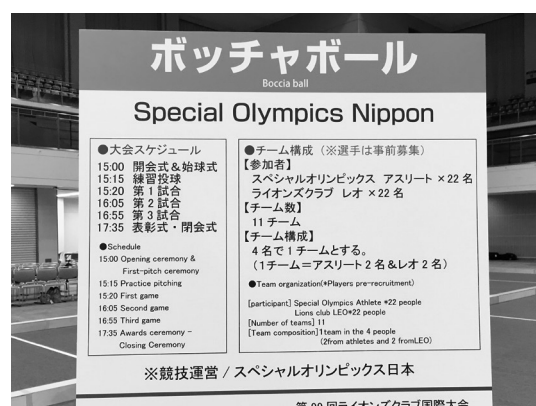


写真1 会場内看板



写真2：SOアスリートによる開会式スピーチ



写真5：表彰式

※写真は筆者撮影



写真3：SOアスリートとレオクラブメンバー



写真4：競技風景

このボッチャマッチが行われた背景としては、長年にわたるライオンズクラブとスペシャルオリンピックスの友好的な関係にある。もともと、ライオンズクラブ国際財団は、SO国際本部と提携し、世界中で開催されるスペシャルオリンピックスのスポーツイベントにおいて、「オープニング・アイズ・プログラム」と呼ばれる無料の視力検査を支援している。オープニング・アイズ・プログラムは、世界で30万人以上のSOアスリートに視力検査を行い、約10万人のSOアスリートに適切に処方された眼鏡を配布している。

また、海外では「チャンピオンズ」ライオンズクラブの結成を通じ、SOアスリートをLCのメンバーとして迎え入れ、これまで奉仕される側だったSOアスリートが、社会奉仕活動を行い、他の人々を助けることができる機会をサポートするという取り組みも行っている。

こういった取り組みを通じて、知的障がい者が地域社会と接点を持ち、社会に貢献する一市民として社会に受け入れられることで、彼らを力づけ、自信や誇りを持つことができ、共生社会構築への架け橋となっている。

(2) EKSデーにおけるユニファイドスポーツ®デーの実施

EKSデー”（イー・ケー・エス・デー）とは、スペシャ

ルオリンピック創設者ユニス・ケネディ・シュライバーの功績を記念して、2010年から9月第4土曜日に日を定めて世界各国のSO組織で取り組まれているイベントであり、「Play Unified to Live Unified（共にスポーツし、共に生きる）」をテーマに、障がいのある人となない人が共同で行う活動を展開している。

スペシャルオリンピック日本では、ユニファイドスポーツ®推進戦略の一環として、2015年より、この記念日を「ユニファイドスポーツ®デー」と位置づけ地区組織での実施を呼びかけている。

まずは、2015年度と2016年度に行われた活動報告のまとめから、EKSデーにおける「ユニファイドスポーツ®デー」について概観する。

	2015年度	2016年度
開催地区	24	33
参加者数		
SOアスリート	530	663
パートナー	365	369
障がいがある人	91	58
ファミリー	460	453
ボランティア	394	478
その他	データ無	842
合計	1,870人	2,863人

表1：EKS デー参加者実績（SON 2015、2016）

競技種目等	実施地区数	
	2015年	2016年
ボウリング	8	16
ボッチャ	3	5
フロアホッケー	3	4
レクリエーション（ミニ運動会など）	4	3
バドミントン	1	2
陸上	2	2
機能開発プログラム	1	1
サッカー	1	1
フットサル	1	1
ウォーキング	-	1
卓球	1	1
テニス	1	1

フィギュアスケート	1	-
バレーボール	1	-
バスケットボール	1	-
フライングディスク	3	1
ダンス	2	-
パターゴルフ	1	-
奉仕活動	1	-

表2：実施競技及びアクティビティ（複数実施あり）

今回のデータは、スペシャルオリンピック日本事務局が行った各地区の実施アンケートがベースであり、あくまでも参加者数、実施内容等の実績報告が中心となっている。今後は、パートナーやボランティアの属性及び参加者の意識調査を行っていきたいと考えている。

EKSデーイベントの開催傾向としては、通常のスポーツプログラムの延長として開催しているケースと、イベント的な要素を盛り込み大学や他団体と連携しながら行っているケースがある。各地区のアンケートに寄せられた感想を下に開催ケースをまとめ、EKSデーにおけるユニファイドスポーツ®実施の効果と課題を整理する。

①他団体との連携事例

〈大学等との連携〉

- ・SON・岩手：岩手大学との共催による学生の参加
- ・SON・山梨：都留文科大学地域交流センターが行っている「クロスボーダー・プロジェクト」との連携

※クロスボーダー・プロジェクト

同大学において、知的障がい・発達障がいの子どもたちの余暇活動支援を目的に立ち上げた活動。インクルーシブな地域づくりに向けて、少しずつ対象を拡大し、現在は、障害の有無に関わらず、広く地域の子どもたちを受け入れており、2015年よりSON・山梨とユニファイドスポーツ®の連携事業を行っている。

- ・SON・和歌山：近隣の看護学校学生の参加

〈その他連携〉

- ・SON・長野：他団体主催イベント「かいぶつのたね2016」にジョイント
- ・SON・奈良：開催協力を受けた自治体より、市長、町長、教育長の参加があり、一緒に交流
- ・SON・滋賀：ロータリークラブとの連携（ロータリアンの参加及び地元商店街の協力、地元中高生の参加）
- ・SON・福岡：地元の学生有志グループ「FUKUOKA PLUS+」と連携し、同グループがイベントの企画、運営を実施

②SON・福岡における実施例

ここでは、筆者が開催に携わったSON・福岡の事例を報告する。

〈実施概要〉

名 称：2016年度EKSデー『ユニファイドスポーツつてなに？-知的障がいのある人と一緒に楽しむスポーツレクリエーション』

日 時：2016年9月24日（土）14時30分～16時15分

会 場：香蘭女子短期大学体育館（福岡市南区横手）

主 催：NPO法人スペシャルオリンピックス日本・福岡

協 力：FUKUOKA PLUS+

参加者：94名

SON・福岡 アスリート（知的障がい者）34人

ファミリー（知的障がい者の家族）26人

パートナー 20人（学生、SOボランティア等）

ボランティア14人

〈内容〉

- ・ユニファイドスポーツ・レクリエーション（ボッチャ、サイコロリレー）
※サイコロリレー：サイコロを振り、出た目の数のコーンまで走り、リレーでつなぐゲーム
- ・フロアホッケー体験（ミニゲーム）

〈実施方法〉

- ・赤組、青組、黄組に分かれてのチーム対抗戦（各

組3チーム合計9チームに分かれて競技：1チーム編成は10人程度）

- ・アスリート、パートナー、ファミリーによる混合チーム（ただし、家族同士は別チームに編成）
- ・約1時間内で、各チームは順番に全競技を行う

SON・福岡では今回2回目の開催となったEKSデーイベントであるが、今回は混合チームにすることで参加者のコミュニケーションを図りやすくしたこと、また、年齢や、障がいのある無しに関わらず参加しやすいようなプログラム構成を意識して行った。

また今回は、企画段階から福岡県内の大学生有志で構成している「FUKUOKA PLUS+」というグループと連携し、スペシャルオリンピックスの理解を深めてもらいながら、イベントの企画運営を担当してもらうということを試みた。FUKUOKA PLUS+は、2020東京オリンピック・パラリンピックの可能性を考え、最大限に活用するため、様々な分野とオリンピック・パラリンピックを繋げた幅広い活動を行うことを目的に結成されたグループである。

今回、他団体に企画運営を依頼した理由としては、イベントを通じてSO活動に学生を巻き込むという目的の他に、死活問題としてのマンパワー不足があった。SON地区組織の多くは、ボランティアで組織運営を行っているところが多く、SON・福岡も常勤の事務局スタッフは2名であり、イベント運営となると常にボランティアコーチやファミリー等の協力を得ながら開催している。しかし、20年の活動が経過する中で、主力マンパワーは高齢化かつ固定化してきており、また、SO活動に対するモチベーションの維持も難しくなっており、既存事業はこなすが新たな分野にチャレンジするという気概が薄れてきているのが実情である。

そういった中、新たなマンパワーとしての学生グループの存在は、新鮮な企画とフェイスブック等のSNSを使った訴求の提案に加え、当日、SO関係者のほとんどが裏方ではなく一参加者として参加することができる

ことで、イベントを楽しみ交流を図ることができ、従来からのSO参加者のモチベーションアップにも貢献した。

また、FUKUOKA PLUS+側からは、「各チーム障がいがある方もない方も、年齢もなにもかもの垣根を越えて団結していた姿が印象的」であり、「最下位のチームにはその場にいた全員が声援を送るなど、大変盛り上がった」、「EKSデーに関わったことで、なにかを一生懸命に行う姿の素晴らしさに刺激を受けたこと、特に、協力し、声を掛け合いながら楽しんでいる参加者の笑顔から、スポーツの魅力を再確認させられた」という感想と共に、同グループのフェイスブックを通じて、EKSデーイベントの様子がアップされた。

〈SON・福岡 2016 年度 EKS デーの様子〉



写真1：グループに分かれて自己紹介タイム



写真2：ボッチャ競技



写真3：フロアホッケー体験



写真4：サイコロリレー



写真5：参加者全員で「EKS」の文字作り

写真提供：スペシャルオリンピックス日本・福岡

③EKSデーにおけるユニファイドスポーツ®実施の効果と課題

EKSデーイベント実施地区の感想コメントを見ると、この記念日にユニファイドスポーツ®を実施することについては一定の理解と共感を得ており、また、他団体と連携しやすく、だれもが主役になれるという意味に

において参加しやすいこと、認知の低いSO活動にとっては訴求力も加わりイベントとしては効果的であることが見えてくる。

その一方で、9月末という日程が、SO地区大会の他、他のスポーツイベント等と時期が重なるため、「イベントの企画準備等に十分時間をさけない」ことと、同時に起こるマンパワー不足及び関係者の負担過多に陥っているという実態も見受けられた。

また、そもそも、「EKSデーに、なぜユニファイドスポーツを行うのか」という意図を理解していない地区が散見した。「EKSデー行事としてユニファイドでなければならない理由が十分に理解できなかった」とする地区は、「まずはアスリート誰もが参加できて十分に楽しめる行事であることが重要」とし、「アスリートの誰もが参加できて、アスリートを主人公としたものであることの方がより良い」というコメントを寄せている。

1968年の創設以降、スペシャルオリンピックスは、スポーツ活動と競技会という実践活動を通じて、知的障がいのある人たちの生活の質の向上に貢献してきたが、「障がい者の自立、社会参加」というキーワードだけでは、SO活動自体が社会から取り残されてしまい、SO地区組織という閉ざされたコミュニティの中でガラパゴス化する恐れさえある。

「アスリートの誰もが参加でき、楽しめる」ことはSO活動を行う上では当然のことであり、アスリートである知的障がい者は最も重要なステークホルダーではあるが、ボランティアや一般市民を、「アスリートを支援する人」から、共に活動する「パートナー」としてとらえ、アスリートと同等のSO活動の当事者として再定義することが求められている。

共生社会への理解、インクルーシブな社会構築という時代が求めている価値は、SOにおいては、もともと内包してきた価値である。そしてこの価値のアウトプットの象徴が、ユニファイドスポーツ®を中心とした一連のユニファイド事業であり、地区組織は、「Play Unified to Live Unified（共にスポーツし、共に生きる）」とい

うキーワードを意識しながら、今後のスペシャルオリンピックス活動を行うことが求められている。

一方、本部であるスペシャルオリンピックス日本（SON）は、ユニファイドスポーツ®を核とした体系的な成長戦略の策定が課題である。個々のユニファイドスポーツ®の効能を説くだけでなく、今、なぜSO活動にユニファイドスポーツ®が必要不可欠であるのかを組織論として説明する必要がある。

また、SON自体のEKSデーにおけるユニファイドスポーツ®デーのあり方や発信についても再考すべきである。現在、SON自体はEKSデーイベントを行っておらず、地区の開催イベント情報をSONのホームページ上で告知するに留まっている。これでは、せっかく各地区でイベントを行っても相乗効果は得られない。自閉症啓発デーやピンクリボン運動、オリンピックデーなどのように、EKSデーという記念日を象徴的に活用すべきである。SON自身がイベントを行うかどうかは別としても、特設サイトやSNSの活用、全国のメディアと連携するなどして盛り上げることは可能である。地区組織にEKSデーにおけるユニファイドスポーツ®デーを根付かせるためにも、SON自体のEKSデーに対する姿勢を明らかにすべきである。

3. まとめ

2015年度のSO Reach Reportでは、世界でユニファイドスポーツ®を取り入れた競技会は1万2千以上行われており、また、ユニファイドパートナーは65万人以上登録されているが、世界的に見ると2014年のユニファイドパートナー約45万人から飛躍的に参加者を伸ばしており、世界のSO活動の主流は、ユニファイドスポーツ®になりつつある。また、SO国際本部は、FIFA（国際サッカー連盟）と連携しワールドカップ開催の際に、「ユニティカップ」というイベントを開催していたが、現在、各国でのユニファイドスポーツサッカー大会を

推進するなど、戦略的にユニファイドスポーツ®を推進している。

まさにスペシャルオリンピックスの生き残りをかけたかのようなユニファイドスポーツ®推進戦略ではあるが、ユニファイドスポーツ®がもたらすソーシャルインクルージョンの価値観は、多様な人々の共感を呼び、様々な団体や人々を効果的に結び付け浸透し始めている。

しかし、日本では、2014年度のユニファイドパートナーは70人、2015年度は71人と横ばいである。これは、ユニファイドパートナーの問題というよりは、2010年以降、SOアスリート自体の参加が伸び悩んでいるという、SO活動自体の停滞が根本的な要因だと考えられる。

ユニファイドスポーツ®は、効果的に取り入れることにより、知的障がい者の社会性や競技能力の向上といった効果が見込めると共に、様々な団体や個人をつなぎ、ネットワーキングを促進し、地域におけるソーシャルサポートネットワーク形成の鍵となりうる。

しかし、現在の地区組織の運営状況では、ユニファイドスポーツ®の推進が活動発展の施策にはなりえない。ユニファイドスポーツ®の推進と同時に、根本的な地区組織の課題を解決するために、ボランティアやファミリーに著しく依存してきた従来のSOプログラムや地区組織の運営を抜本的に見直し、適切なマネジメントモデルを考案することが急務である。

<引用・参考資料等>

1. Special Olympics Reach Report Summary 2014、2015
(<http://www.specialolympics.org/>)
2. 公益財団法人スペシャルオリンピックス日本 2013 「ユニファイドスポーツ導入と普及」PPT資料
3. ライオンズクラブ国際協会ウェブサイト
(<http://www.lionsclubs.org/>)
4. 一般社団法人ボッチャ協会ウェブサイト
(<http://www.japan-boccia.net/>)
5. 公益財団法人スペシャルオリンピックス日本
EKSデーターアンケート集計結果 2015、2016
6. FUKUOKA PLUS+ フェイスブック